Book for Project “incipit nursery”
インキピット保育園 プロジェクト・ブック

incipit

incipit

incipit保育園開発プロジェクト

プロジェクトメンバー

ー施設運営者ー
株式会社にじいろキャンバス

ー協力ー
にじのき保育園職員
にじのき保育園に通う子どもたち

ー設計ー
蘆田暢人建築設計事務所

ー現場施工管理責任者ー
多喜代　和昭

ープロジェクトマネジメントー
（環境デザイン・人材育成）
Learning in Context

Contents

0．運営法人について・・・3ページ

1．プロジェクト概要・・・4～7ページ

2．コンセプトメイキング・・・8～13ページ

3．空間デザイン・・・14～25ページ

4．人財育成・・・26～31ページ

5．課題に対する結論と今後の取り組み・・・32，33ページ

運営法人

にじいろキャンバス

会社名：株式会社にじいろキャンバス

所在地：千葉県市川市行徳駅前1-24-1

設立：2016年6月

代表者：小林祐輔　WEB：

▶ VISION

100年先に笑顔でいるために、「今」あなたなら何をする？

▶ MISSION

乳幼児教育のスタンダードを構築する

事業

Missionである「乳幼児教育のスタンダードを構築する」を実現するために、「施設運営」をはじめ、４つの事業を展開。

施設運営

保育（養護と教育）を通じた乳幼児教育実践の場。
子ども、保護者と共に過ごし、共に育つことを大切にしています。

にじのき保育園（行徳／小規模A型）

Concept：共存共育

所在地：千葉県市川市行徳駅前1-24-1

開園：2018年4月

定員：17名（0～2歳）

▼ WEB

incipit 保育園（南行徳／小規模A型）

Concept：冒険の始まり

所在地：千葉県市川市南行徳1-12-7

開園：2020年4月

定員：19名（0～2歳）

▼WEB

保育事業を通じて得た知見や研究成果を、
一人でも多くの方に共有し、100年先の社会、そして、
子どもたちの未来がよりよくなることを目指します。

コンサルティングサービス

・セミナーの企画や実施
・保育事業運営のコンサルティング

研究・開発

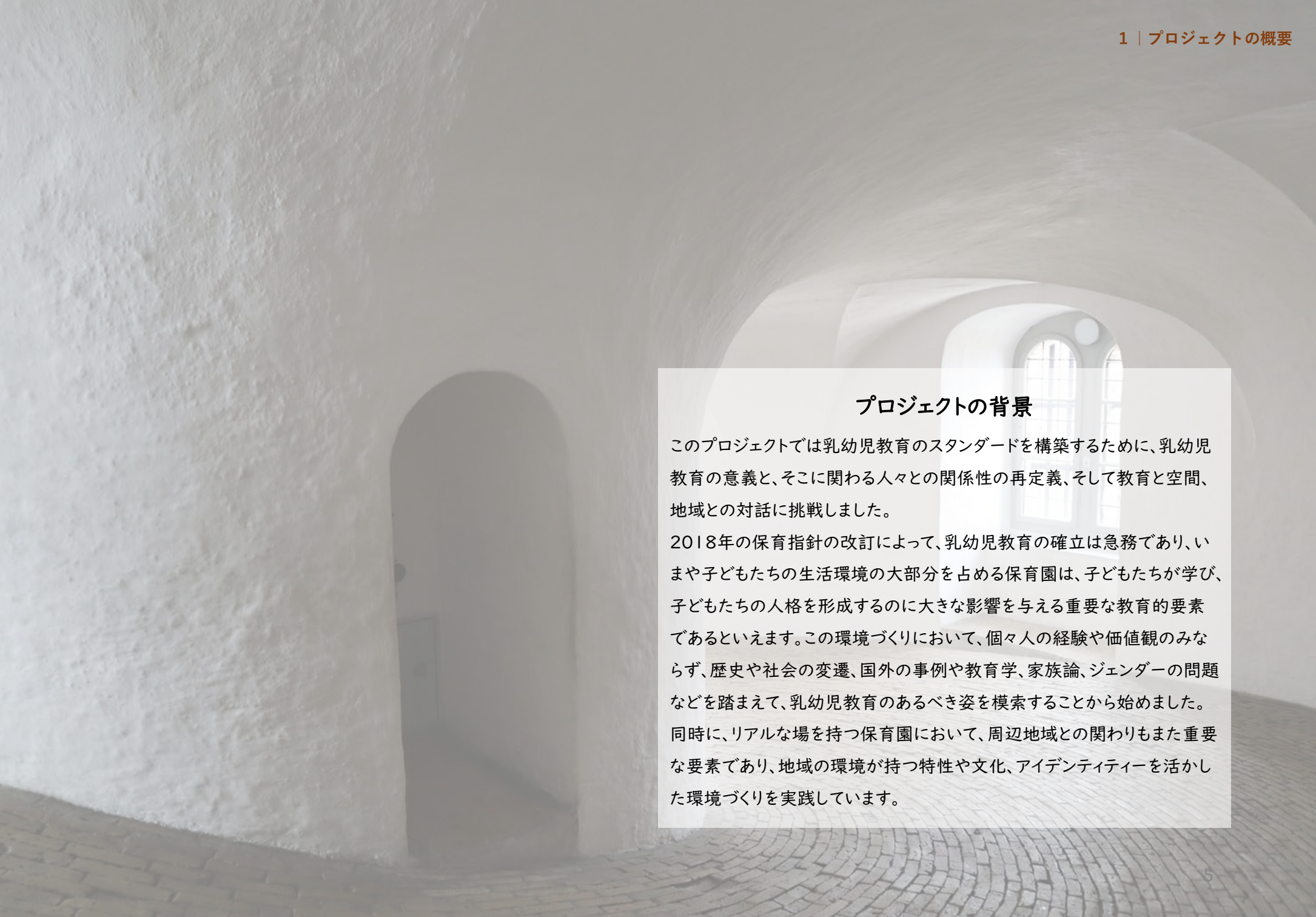
・保育・教育プログラムの研究開発
・研修・研究会の企画や実施
・保育着づくり
・玩具の開発

コミュニティーづくり

・地域に根付く保育カフェの運営
・保育の写真展

1

プロジェクト概要



プロジェクトの背景

このプロジェクトでは乳幼児教育のスタンダードを構築するために、乳幼児教育の意義と、そこに関わる人々との関係性の再定義、そして教育と空間、地域との対話に挑戦しました。

2018年の保育指針の改訂によって、乳幼児教育の確立は急務であり、いまや子どもたちの生活環境の大部分を占める保育園は、子どもたちが学び、子どもたちの人格を形成するのに大きな影響を与える重要な教育的要素であるといえます。この環境づくりにおいて、個々人の経験や価値観のみならず、歴史や社会の変遷、国外の事例や教育学、家族論、ジェンダーの問題などを踏まえて、乳幼児教育のあるべき姿を模索することから始めました。

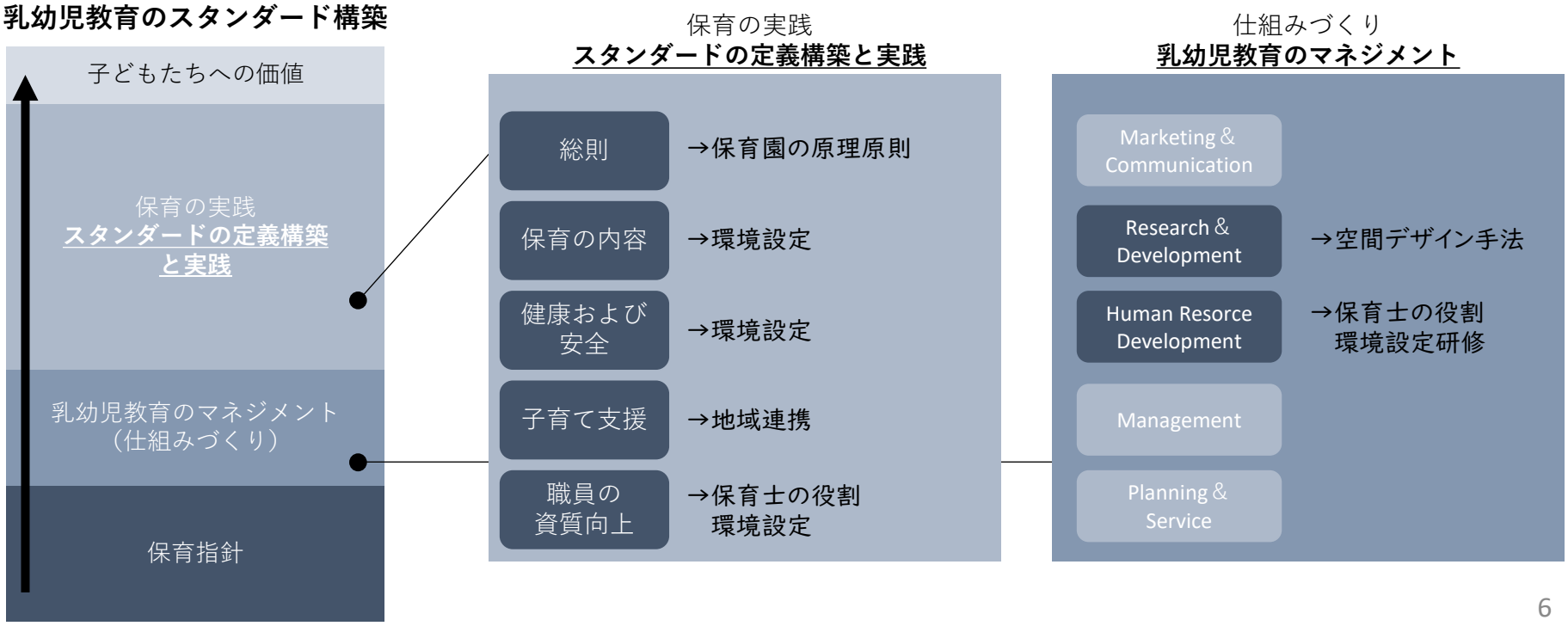
同時に、リアルな場を持つ保育園において、周辺地域との関わりもまた重要な要素であり、地域の環境が持つ特性や文化、アイデンティティーを活かした環境づくりを実践しています。

プロジェクトの課題設定

本プロジェクトを進める上で、大きく2つの視点から取り組むべき課題を検討しました。
ひとつは、乳幼児教育は比較的新しい概念であり、そのあり方は各個人で異なり共有概念化されていないこと。もうひとつは、1園目である「にじのき保育園」での実践から得た知見をいかに活かしていくかです。

にじいろキャンバスにおける本プロジェクトの位置づけ

乳幼児教育のスタンダードの構築の上で、「保育園の原理原則、および環境設定に関する調査および実践」と「空間デザインに伴う乳幼児教育の専門家人財育成実践」プロジェクトです。



取り組んだ課題 ー解決すべき問い

この2つの視点から、以下の課題を設定し、
プロジェクトに取り組みました。

1

子どもの預かりや幼児教育から、乳幼児教育に転換する上で、保育園という「場」や「空間」そして、人々との関係性はどうあるべきか？

アプローチ
1）「場の定義」「空間の定義」「関係者への価値」を検証
2）職員が空間と保育の関係を理解し、実践する|継続的対話

2

保育園の運営および空間設計において、経営者や設計者の暗黙知的な個人の価値観や感性偏重になっていないか？現場で過ごす子どもたちや保護者、職員が物理的、情緒的にどのように過ごすかが検討されているか。

アプローチ
職員を含めた空間デザインワークショップの実施

3

切っても切り離すことのできない、地域の特性や文化を捉え、地域になじみ、愛着を持ち、ふるさとにしていくためにできることはなにか？

アプローチ
1）地域をリサーチし、園内の環境に取り入れる
2）地域全体を園庭と捉え、地域での活動を計画する

プロジェクトの流れ

2018.04	にじのき保育園設立
06	イタリア（レッジョ・エミリア）乳幼児教育視察（参加1名）
08～	対話型人財研修【保育園の再定義プロジェクト】開始
2019.01	本プロジェクト開始【課題・仮説設定】 「場の定義」「空間の定義」の検証 「にじのき保育園の保育と空間」に関するヒアリング
03	物件の確定／空間デザインの基本設計 住民および近隣小学校等への説明
04	市川市へ認可申請
06	デンマーク教育視察（参加3名）
08	子ども向け【保育園カラーリングワークショップ】を実施 職員向け【空間デザインワークショップ】を実施 実施設計開始（～9月）
10	入札　→　施工業者決定
11	工事開始
2020.03	工事完了 入園者，職員向け園内見学 室内環境準備（計画および備品搬入） 開園前職員研修
04	開園 対話型人財研修【incipitの約束づくりWS】

2

コンセプトメイキング

Contents

・・・

保育園の「場の定義」・・・10,11

保育園のコンセプト・・・12,13

保育園の「場の定義」

保育園の開設にあたって、そもそも保育園が果たすべき役割や機能はなにか？ 検証を行ないました。レッジョ・チルドレン（イタリアのレッジョ・エミリアの乳幼児教育を運営する組織）の施設開発を参考に「歴史の中での施設」「社会の中での施設」「子どもにとっての価値」「保護者にとっての価値」「地域にとっての価値」「保護者の職場にとっての価値」といった6つの観点から、保育園の社会性や公共性について検討を行ないました。
これに基づき、「空間の定義」と園のコンセプトを決定しました。

保育園は子どもたちの「人間形成の土台を育む」施設であり、「出会い」と「共に育つ」場

次ページの6つの観点による考察を通じて、私たちは保育園が子どもたちの「人間形成の土台を育む」施設であることを改めて確認することになりました。「人間形成」とは国籍や性別などに関わらず、一人ひとりが一人の「ヒト」であることを認め、育んでいくことを意味しています。個々が権利や可能性を有し、また社会を形成する存在として、その土台となる自我や他者、物質、現象を含む世界との関わりを育むことを目指します。そのために、ヒト・モノ・コトとの「出会い」を環境を通じて提供し、子どもだけではなく、保護者や保育者といった大人も、子どもたちと一緒に活動や体験の中で学び、共に育つことが大切であると考えています。

参考にした著作物・文献

（著書）『保育と家庭教育の誕生』『日本の保育の歴史』『幼児期と社会』『倉橋惣三に学ぶこれからの保育』『なぜ今レッジョエミリアなのか？』『「だれのため？「何のため？」から考える』『保育者のための教育と福祉の事典』『子ども、空間、関係性』『デザインとビジュアルコミュニケーション』
（論文・記事）『歴史的にみる母子家庭の政策の変遷とその課題』『２１世紀の学習者と教育の４つの次元』『子どもたちの生活と家庭や地域社会の現状。２１世紀を展望した我が国の教育のあり方について』『児童憲章』『児童の権利に関する条約』『児童福祉法』『教育基本法』『明治から昭和初期における保育と現代の保育』

① 歴史の中での施設

人権、多様性を前提とした非認知能力の育みとさまざまな出会いの保障

教育史、家族論、産業構造の変化、ジェンダー論といった視点から保育の歴史を読み解き、未来の社会、そして今あるべき姿を捉えました。
指標化しやすい知識優先の教育は、大量生産大量消費を前提とした社会において、効率的な教育システムであった反面、個々人の内面や計測しがたい非認知能力は性格や特質として軽視されました。
また、子どもたちにとって重要であった、街や地域の「出会い」や「学び」の場という機能を失わせてしまいました。VUCA Worldともいわれるこれからの不確実かつ多様性をはらんだ社会において、自我を含む非認知能力の育みとさまざまなヒト・モノ・コトとの出会いを保障することが、保育の責務といえます。

② 社会の中での施設

個々人を尊重し、「自ら」のやり方や感じ方、考え方を大切に育む

ベンチマークとして海外視察で訪れたイタリア、デンマークを中心に、国外の教育に着目し、日本社会の現状把握を行ないました。
日本では子どもを未来の市民と認識する一方、ヨーロッパは「今の市民」と認識し、人権が大切にされていると感じられました。教育においても小学校以降、型や形式を重んじる日本と異なり、教育の目的を自らの考え、やり方を発見し「自我の育むこと」としています。乳幼児教育施設は、子どもたちの学びと出会いの場として認識されています。教育を大切にすることは個人の人生を豊かにし、最も効果的な経済への投資という研究もあります。日本社会でも、子どもたちの学び，出会う権利を保障することが、保育園の役割と考えました。

③ 子どもにとっての価値

さまざまな「ヒト・モノ・コト」と出会い、自我の確立と世界を獲得していく場所

重要度の高まる乳幼児期の教育。「安心して挑戦できる」楽しい環境を前提とし、さまざまな出会いを提供できる小さな社会であることが大切。

④ 保護者にとっての価値

子どもたちの教育を共に担う施設であり専門家

保育園は「親」としてのはじめての社会です。子どもを育てる責任を一緒に持ち、子どもを一人の「人」として見る中で共に育つことを大切にします。

⑤ 地域にとっての価値

失われた「地域」という概念を大きな園庭として捉え、再興する。

以前のような地域のつながりが希薄になった今だからこそ、地域を大きな園庭として捉え、積極的に園外で活動し、人と関わる喜びを地域に根付かせていく。

⑥ 保護者の職場にとっての価値

保護者が安心して働ける環境を提供している施設

保護者が安心して働ける環境を提供します。また、子どもは社会の共通の宝、財産で、企業にとっては未来の顧客や従業員を育んでいる場でもあります。

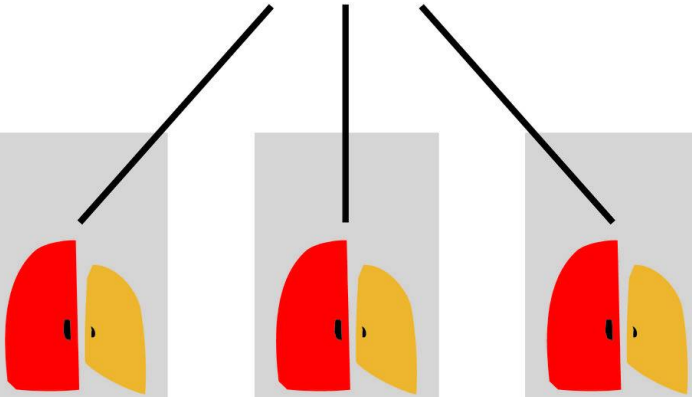
― 保育園のコンセプト ―

冒険のはじまり

incipitとはラテン語で「～からの始まり」という意味があります。小規模保育事業とは、子どもたちが初めて親元から離れて社会に触れる第一歩です。その子が色々な人、色々な事、色々な場所、色々な物と出会い、「自分で体験・経験をする」ことを大切にしています。人から教えられたことだけではなく、自分から学ぶこと。「乳児からは難しい」ではなく、乳児から行うことに意味があると考えています。それにはすぐに達成できないこともあるかもしれません。葛藤を感じるかもしれません。でも子どもたちは自分たちの興味関心を持っていることは、必ず乗り越えていきます。むしろ乗り越えることを楽しんでいるかのようにも見えます。それを繰り返しながら、「自分自身」を構築して、人生の土台になるのではないでしょうか。そんな姿に大人も教わることが多く、子ども、大人として分けるのではなく、「人」として共に過ごし、教え、教えられながら共に育つ学んでいると思っています。「簡単」や「楽」でなくても目を輝かせて挑戦する姿を何度も目にし、子どもたちは学びという人生の冒険をしているんだなと感じています。そして私たち大人も子どもたち同様、それに気づいた時から冒険者として自分の人生の冒険の続きを始めなければいけない。その最初の一歩を一緒に踏み出すための施設でありたいと願っています。

incipit 保育園　～冒険のはじまり～

理念
「一人ひとりを主人公に」



0歳	▶▶	1歳	▶▶	2歳

方針

「色々な体験」	「心を動かす」	「共に育つ」

目標
「三つのごかん」

視覚	喜び	子ども
嗅覚	悲しみ	保育士
聴覚	驚き	親
味覚	恐怖	地域
触覚	怒り	行政

― 理念と目標 ―

一人ひとりを主人公に

全体保育園コンセプトから保育園の理念に落としたのが、「一人ひとりを主人公に」です。個性や考え方、発達など一人ひとり全く違います。だからこそ歩みも歩幅も違います。その子の「今」を大切にした保育が必要です。そして、主人公同士ぶつかる時もあります。その時に必要なのが、自立力と対話力です。人は一人では生きていけません。矛盾のように聞こえてしまうかもしれませんが、自分で自立していくためには人に助けてもらいながらでないと自立していくことは難しいと考えています。そして助けてもらうためには、対話能力が必要です。押し付けでも傾聴だけでもなく、互いが意思を示し、新しい考え方を作りながら共存していく。そんな社会に出ても「当たり前」と言われていることを遊びの中で学びながら、自分の人生は自分が主役でストーリーを作っていって欲しいという願いを込めています。

「三つのごかん」

当園に関わる人の行動目標です。「色々な体験」を通して「心を動かす（し）」ながら「共に育つ」という関係性の中で、子どもたちの発達に合わせた「三つのごかん」を各年齢で育みます。0歳児クラスでは「五感」。視覚、聴力、嗅覚、味覚、触覚などこの時期の経験がこの後の育ちに重要です。1歳児クラスの「5感」は5つの感情です。喜び、悲しみ、驚き、恐怖、怒り。色々なものに興味、関心、意欲が出てくるこの時期に、それに見合った感情の自己表現を大切にします。2歳児クラスは5つの関わりを意味している「5関」です。「他者という概念が芽生える時期」でもある2歳児クラス。お友だちとも一緒に遊ぶ楽しさを感じられてくるこの時期に、自分に関わっている「人」に触れて出会う経験を大切にしていきます。子どもたちの発達やその時々の興味関心に合わせた「今」大切なものを存分に楽しめる場所が保育園であるようにしていきます。「今」を大切にすることによって「未来」が大きく変わると思っているからです。そんなことを考えて大人も子どもも今を全力で楽しんでいます。

3

空間デザイン

空間デザインのコンセプト

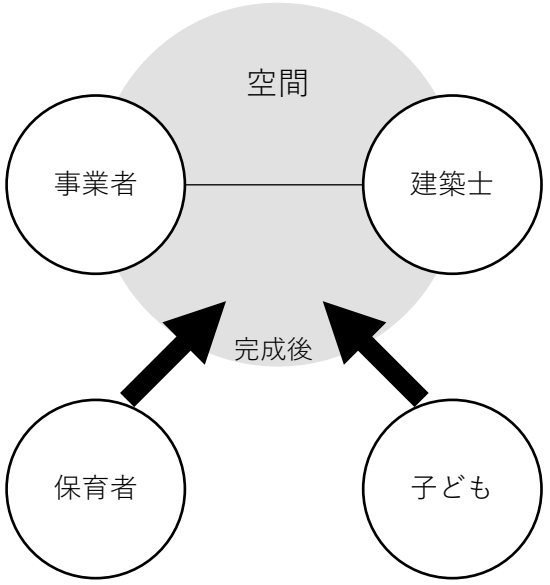
子どもと保育者、事業者、建築士が一体となり保育を建築で包み込む

本プロジェクトでは、空間デザインに携わる関係者の関係性の見直しからスタートしました。従来、主として実際の保育に関わる保育者や子どもは完成以前に携わることがなく、管理者となる事業者や園長、建築士との間で設計、施工が行われます。今回は設計の段階から積極的に子どもや保育者に参加の機会をつくり、「子ども」「保育者」「事業者」の三者による保育を包み込むように空間デザインを行いました。また、コスト面ではにじのき保育園に比べ、広さは2倍にもかかわらず、総額費用は1.3倍程度に収め、坪単価ベースで〇%カット。際限なく費用をかけてよいものをつくるのではなく、行政からの助成金の中で工夫をしながら、求める空間づくりを実践しました。

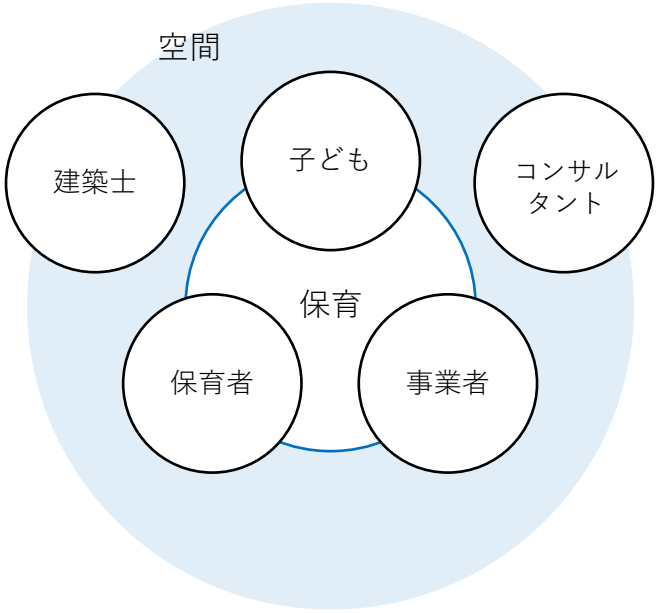
Contents

にじのき保育園の良い点, 課題点から・・・16
空間デザインのポイント・・・17
部屋別空間の定義・・・18,19
空間を構成する6つの要素・・・20
地域特性を活かしたカラーリング・・・21
空間デザインの記録・・・22, 23
空間デザインワークショップ・・・24,25

― 従来の空間デザインの関係性 ―



― 今回の空間デザインの取り組み ―



にじのき保育園の空間の振り返り

新園の空間デザインにあたり、1園目であるにじのき保育園の職員を対象に「にじのき保育園の保育と空間」についてヒアリングを実施しました。良い点、改善すべき点を明らかにし、incipit の空間デザインへの反映を試みました。

Good

＜良い点＞
◆ワンフロアであることでの「つながり」や「広がり」
◆空間の柔軟性

Be improved

＜改善点＞
◆空間の「分断」が難しいことにより、メリハリがつきづらい
◆職員の生産性が確保されにくい

New Context

＜新しい文脈＞
◆空間のつながりを確保しつつ、必要に応じた分断が可能な、「空間の柔軟性、可変性」

空間デザインのポイント

◆ ワンフロアのような空間の連なりや一体感。

◆ 利用目的や主に使う年齢ごとの発達段階に配慮した空間ごとのコンセプトを定義。これによって機能のみではなく、実施したい活動、その時々の情緒に合わせて使う人目線での空間分け。

◆ 「学びの場」「出会いの場」「安らぎの場」の3つのコンセプト

◆ 子どもたちの過ごす空間の区切りは引き戸のみ。各部屋は活動に合わせて環境を変えられるよう、柔軟性と可変性の高い設計に。

◆ 街の中の施設として、外からの見え方や景観との調和にも配慮。

◆ 「スタンダード」を意識し、助成金を大きくはみ出さない建築コスト。

保育室の空間の定義

各居室をそれぞれの果たすべき機能と利用者、提供するサービスを可視化し、それに見合った色彩や手触り、構築物を設定しました。

①和室

広場のように集い、語らう場所

空間の種類
機能：食事、食育、表現の場、職員研修
利用者：全園児、全職員、保護者など
提供サービス：食事、休憩、運動、研修など

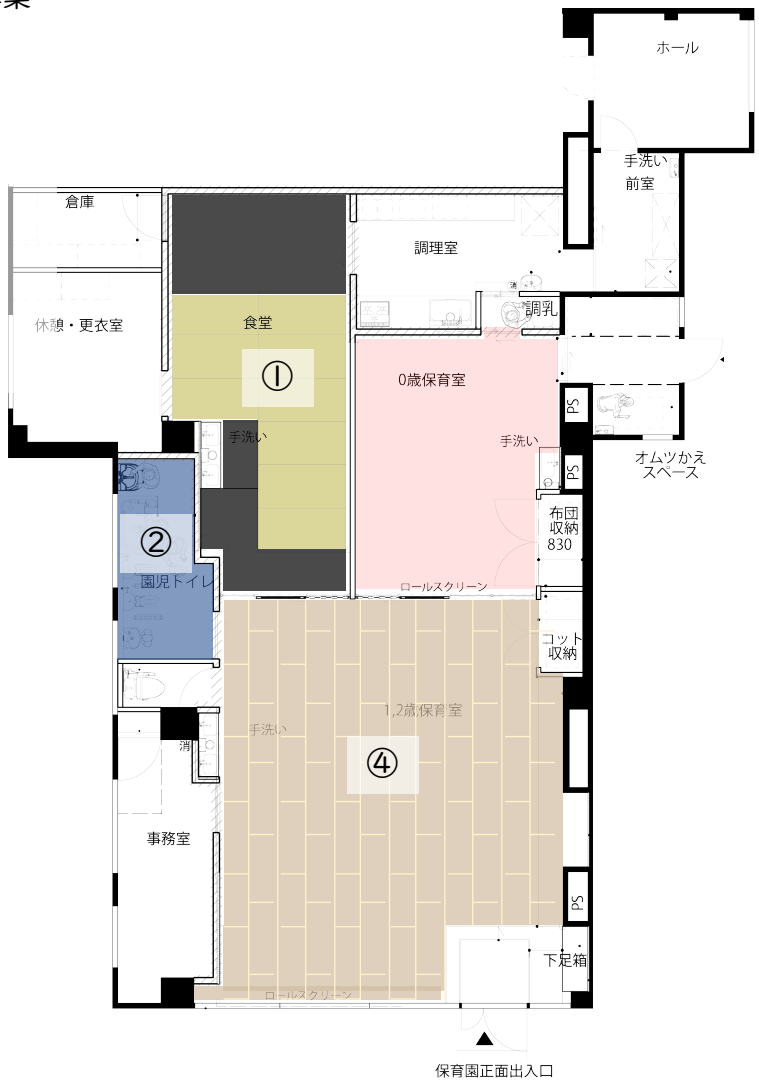
デザインガイドライン
カラーリング：和を感じる畳と黒、黄色（壁面）
テクスチャー：ザラザラ、ツルツル
ストラクチャー：畳、ちゃぶ台、ハイテーブル

園内で過ごす人が集い、食事をとったり、畳の上で寝転んだり、時には運動も行います。職員の会議や研修でも利用できるよう、奥の壁はプロジェクター投影用の塗装を施しています。

②園児用トイレ

心地よさと安心感を通じた情緒と信頼の育み

空間の種類
機能：排泄、汚れを落とす、シャワー
利用者：全園児（、職員）
提供サービス：情緒の安定、不快の解消、
体の不思議を知る
デザインガイドライン
カラーリング：清涼感のある青、白
テクスチャー：肌触りの良いつるつる、温かい、冷たい
ストラクチャー：便器、シャワーパン、水道（ひねり）、収納



③0歳児室

安らぎを感じられる、柔らかい部屋

空間の種類
機能：養護と教育、安全基地
利用者：全園児（主に0歳児）、職員
提供サービス：心の充実を獲得、スキンシップ、
心の発散、五感のトレーニング
デザインガイドライン
カラーリング：柔らかい暖色と白、桃色（壁面）
テクスチャー：柔らかい、温かい、ぽこぽこ
ストラクチャー：低い玩具棚、モビール、音

主に0歳児クラスが利用する部屋。安全基地となるよう「柔らかい部屋」をコンセプトに。安全、安心に配慮しながらも、だからこそ取り組める挑戦や新しい出会いを応援する部屋です。

④1，2歳児室

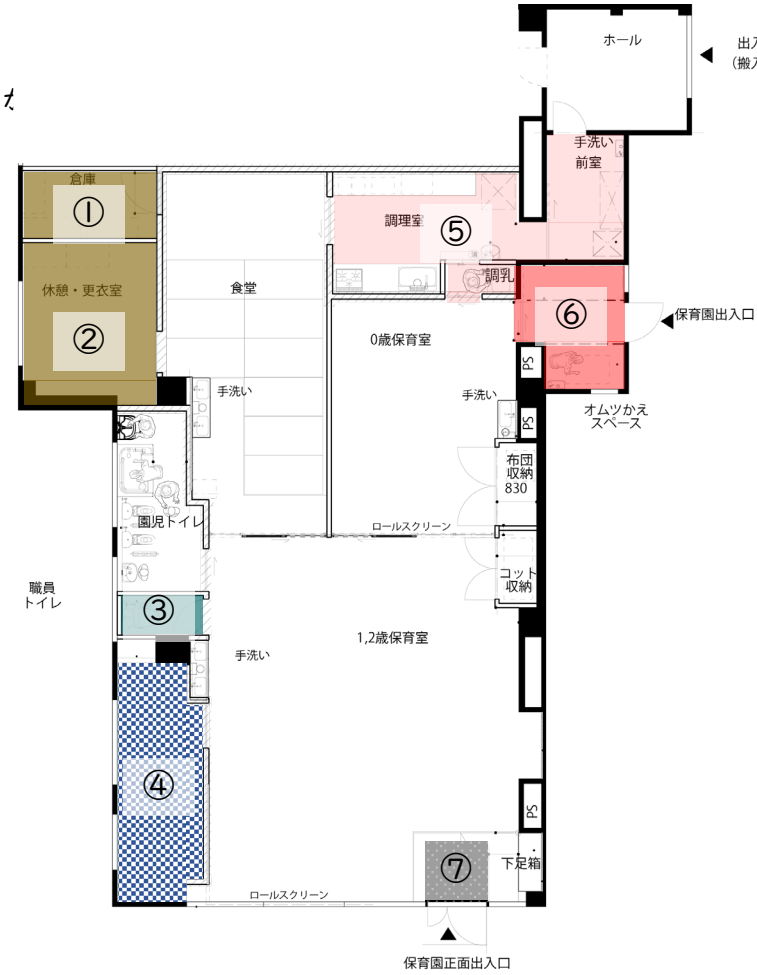
遊びこみ、学びが生まれる場所

空間の種類
機能：養護と教育、動線、はじまりの場、集まる
利用者：全園児（主に1，2歳）、保護者、職員
提供サービス：探求と発見、自我の確立、協働、
選ぶ権利、五感のトレーニング
デザインガイドライン
カラーリング：木の色、白、青（壁面）
テクスチャー：肌触りのよさ、硬い、温冷
ストラクチャー：玩具棚、観葉植物、机、いす

和室と0歳児室を結ぶ保育園の中心部。シェアハウスのように、みんなが行き交いつつも、パーソナルスペースが持てるよう、環境設定します。遊びこみ、学びを展開する場所です。

保育室以外の空間の定義

地域の特徴を保育室にも反映・その際日本の伝統色か
ら色選びを行ないました。



①倉庫
ワクワクが部屋全体に詰まった宝箱

空間の種類
機能：見える収納、園の資産・財産を保管する
利用者：職員（子ども）
提供サービス：自己決定の選択、心動く体験の獲得

デザインガイドライン
カラーリング：温かい黄色、白（置いているモノが映える）
テクスチャー：ざらざら、ひんやり、きらきら
ストラクチャー：スチールラック

②職員更衣室兼休憩室
ホッと一息つける職員の居間

空間の種類
機能：休憩、会話と対話の場、素の自分に戻る
利用者：職員
提供サービス：頭、心、体を休める、会話と対話の練習
保育準備や作業スペース
デザインガイドライン
カラーリング：落ち着きと温かさのある黄色、茶色
テクスチャー：つるつる、ざらざら
ストラクチャー：ロッカー、更衣スペース、本棚、机

③大人用トイレ
心地よく、気持ちもリセットできる

空間の種類
機能：排泄、気持ちや頭の中を整える
利用者：職員、保護者、来客
提供サービス：気持ちの安定、考える／考えない時間

デザインガイドライン
カラーリング：落ち着いた白と青
テクスチャー：ざらざら、つるつる、温かい
ストラクチャー：トイレ、水道、収納

④事務室
落ち着き、集中できる環境

空間の種類
機能：事務作業、応接、大人の意見交換の場
利用者：職員、保護者、来客
提供サービス：連携、意思の疎通、計画、振り返り、学び

デザインガイドライン
カラーリング：白と青の清潔感と落ち着きある色彩
テクスチャー：つるつる、ひんやり
ストラクチャー：鍵付き棚、通信機器、本棚、机、椅子

⑤調理室
会話の生まれる「感じられる」調理室

空間の種類
機能：調理、食品・食器・調理器具等の衛生管理
利用者：職員
提供サービス：楽しい食事体験（味、香り、音）、
健やかな身体づくり、素材同士の対話
デザインガイドライン
カラーリング：柔らかいピンク、白、メタリック
テクスチャー：さらさら、テカテカ、ピカピカ
ストラクチャー：調理器具、殺菌庫、収納、窓、鏡、手洗い

⑥執務室
業務負担を軽減する洗濯等の集合エリア

空間の種類
機能：洗濯、乾燥、清掃用具、日用品等の収納
利用者：職員
提供サービス：洗濯等業務動線、快適性、効率性の配慮

デザインガイドライン
カラーリング：柔らかい暖色、白
テクスチャー：つるつる、ピカピカ
ストラクチャー：洗濯乾燥機、収納、おむつ替えスペース

⑦玄関
トンネルを抜けたような開放感

空間の種類
機能：保育園への入口出口（物理的・精神的）、靴脱着
利用者：全園児・保護者・職員・来客
提供サービス：保育園を訪れたワクワク感の提供

デザインガイドライン
カラーリング：グレー、木の色、外からの視認性は下げる
テクスチャー：肌触りの良い木
ストラクチャー：靴箱、収納棚、掲示スペース、美術館

空間を構成する6つの要素

●●●●●●

指標にしたのは、子どもと空間についての研究がまとめられた『子ども、空間、関係性』（学習研究社発行）です。これらは空間を構成する非物質的な質として挙げられています。乳幼児期の子どもたちは五感の発達期であると同時に、その五感を使って自分たちの世界を獲得していきます。日常を過ごす中では無意識的に子どもたちを取り囲む要素だからこそ、大切に検討を重ねました。

素材

つるつる、ザラザラ、
硬い、柔らかい、
ひんやり、ぽかぽかなど、
触って覚える子どもたちだから、
部屋や部分の目的やねらいに
合わせて、さまざまな異素材を
組み合わせました。

色彩

誰が、どんなときに使うのか、
どのような気持ちで過ごして
ほしいのか、子どもたちの発
達や保護者、保育者の気持ち、
利用する場面を想定して、
配色しました。
地域の色も取り入れています。

地域の色について →

香り

子どもたちの食欲増進や
食事を楽しみにできるよう、
ごはんの香りが届く設計に。
さらに木の香り、畳の香りなど、
素材そのものの香りをたっぷり
感じられる保育室です。

光

危ないところがないように、
均一的な明るさになりがちな
保育室。ですが、日常の中で、
光と影を楽しんだり、気分に合
わせて好きな明るさの場所で
過ごすことを大切に、
明かりと暗さを演出しています。

音

I園目のにじのき保育園での
課題だった音。
泣き声や活動の声、
職員のひそひそ打ち合わせで
大切な活動やお昼寝を邪魔し
ないよう、必要に合わせて
部屋を区切れる仕様に。

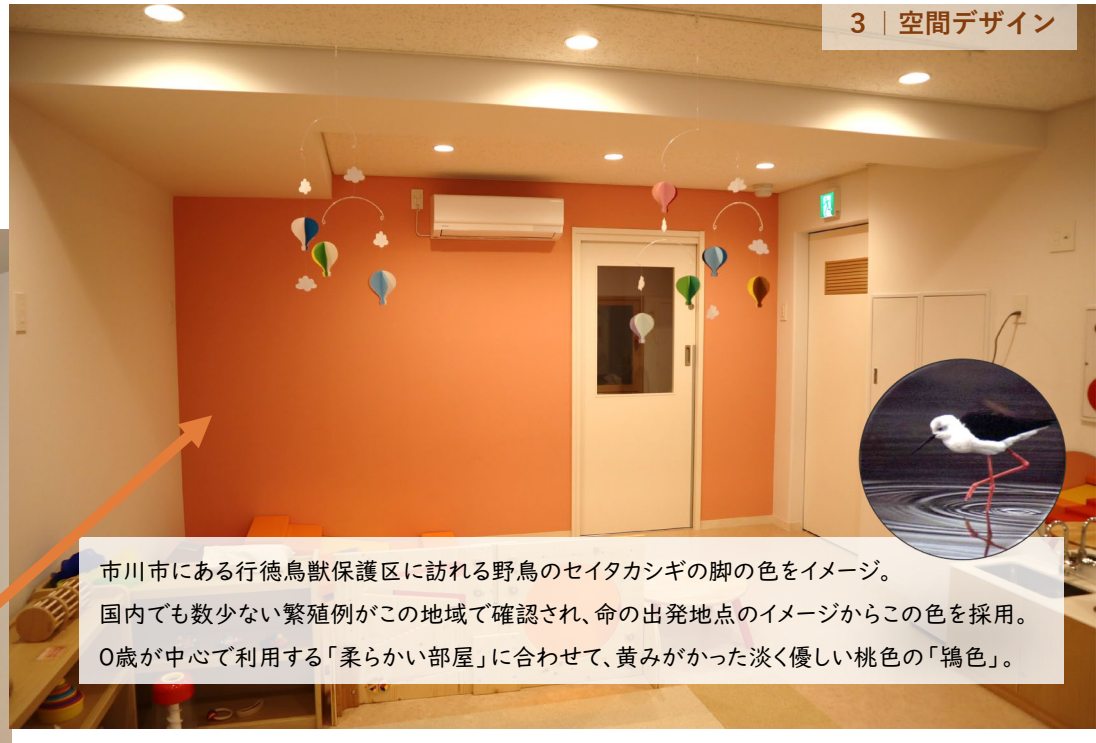
微気候

外の大きな機構を「大気候」、
そこから隔絶された異なる
気候を「微気候」をいいます。
敏感な乳幼児期の子どもたち。
季節や天気の様子を見ながら、
湿度や温度、明るさを
調整できることに配慮しました。

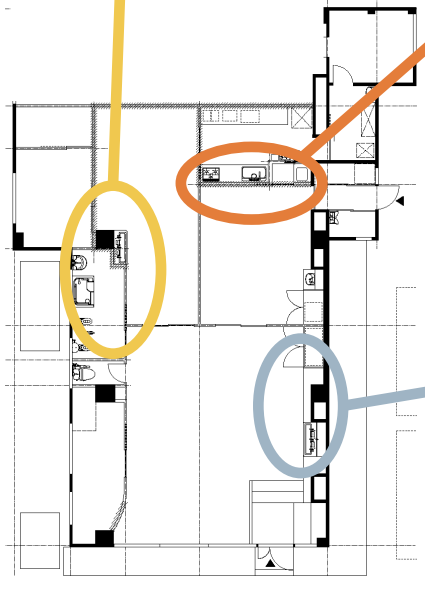
地域特性を活かしたカラーリング

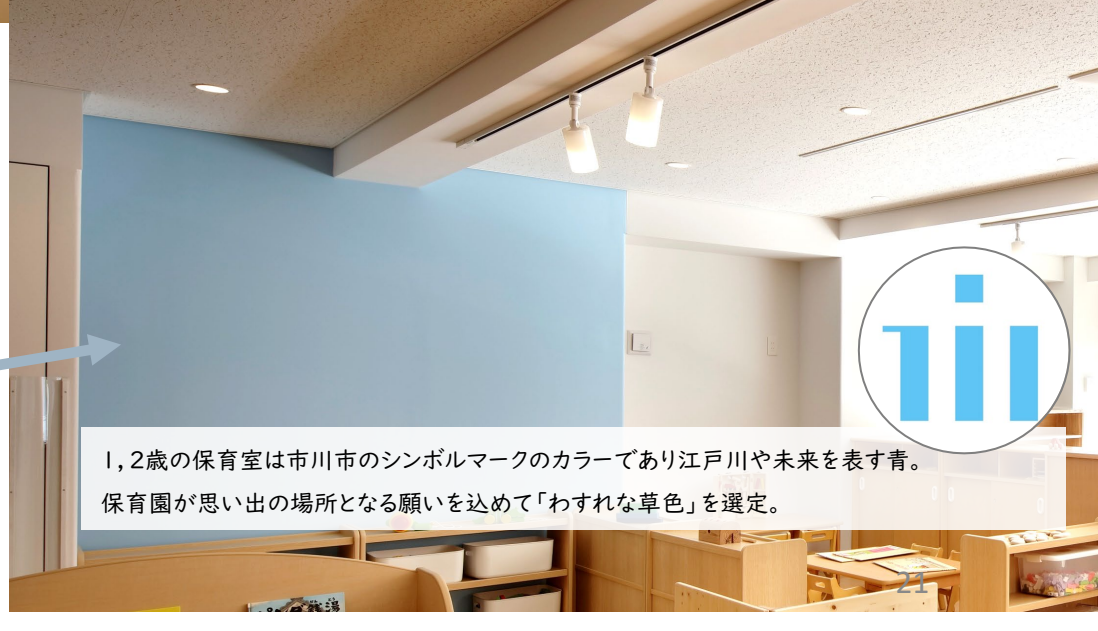
メインとなる3つの保育室の壁面は、地域の特徴をイメージしています。
その際、日本の伝統色から色選びを行ないました。

食堂として使う和室は園の目の前にあるイチョウ並木をイメージした黄色。
人生の基礎となる場をイメージし、染め物の下染めに利用される「黄蘗色」。



市川市にある行徳鳥獣保護区に訪れる野鳥のセイタカシギの脚の色をイメージ。
国内でも数少ない繁殖例がこの地域で確認され、命の出発地点のイメージからこの色を採用。
0歳が中心で利用する「柔らかい部屋」に合わせて、黄みがかった淡く優しい桃色の「鴇色」。





1，2歳の保育室は市川市のシンボルマークのカラーであり江戸川や未来を表す青。
保育園が思い出の場所となる願いを込めて「わすれな草色」を選定。

空間デザインの記録

施設の原理原則となる「場の定義」「空間の定義」の設定後、それに見合う地域・物件の選定を行いました。その後、「人中心」の社会として知られるデンマークの教育施設視察に保育士を含めた3名で参加し、コンセプトや人中心の空間デザインへの知見を深めました。前年視察へ訪れたイタリアのレッジョ・エミリアの対話や思想、実践の数々もアイデアを広げる参考になっています。それらを踏まえ、子どもや保育者を交えたワークショップを通じて、実際にそこで過ごすそれぞれの人が心地よく過ごせる空間づくりを目指しました。

- 2019.01　本プロジェクト開始【課題・仮説設定】
  「場の定義」「空間の定義」の検証
  「にじのき保育園の保育と空間」に関するヒアリング
- 03　物件の確定／空間デザインの基本設計
  住民および近隣小学校等への説明
- 06　デンマーク教育視察（参加3名）
- 08　子ども向け【保育園カラーリングワークショップ】を実施
  職員向け【空間デザインワークショップ】を実施
  実施設計開始（～9月）
- 11　工事開始
- 2020.03　工事完了
  室内環境準備
- 04　開園

各概要追記（リンク対応）

場の定義

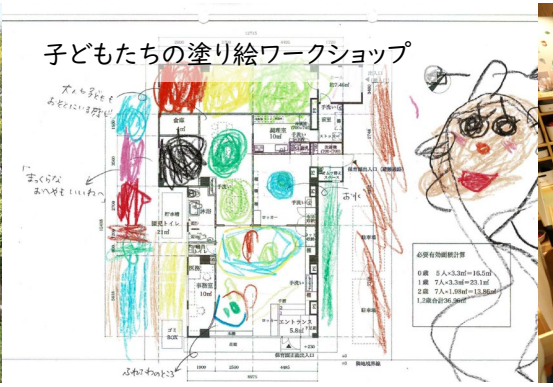
場の定義

物件内見

設計（蘆田暢人建築設計事務所）

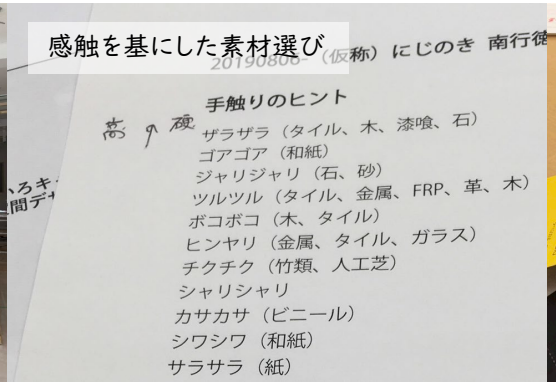
デンマーク視察（オーフス市）
ー教育施設を手掛ける設計事務所

デンマーク視察（オダー市）
ー森のようちえん


子どもたちの塗り絵ワークショップ

職員向け空間デザインワークショップ

施工中



感触を基にした素材選び

日本の伝統色から壁面色選び

地域の色をモチーフにした看板デザイン

空間デザインワークショップ

1日の流れで空間を捉える

各部屋の機能やデザインだけではなく、1日の流れをシミュレーションし、
人の動線や感情の揺れ動き、その時にどんな行動、気持ちが生まれるかを想像し、
部屋と部屋とのつながりやデザインを考えていきました。

課題

① 当事者が関わらない設計
実際に多くの時間を過ごす、子どもたちや職員が関わらず、実際の運用や気持ちへの配慮に欠けることに課題を感じていました。

② 職員の環境設定への理解・思考
従来のプロセスでは、設計意図や想定外の使い方になることが多く、また、活動や大人都合の環境づくりになることも見られました。

アプローチ

① 子ども、職員の参加
子ども、職員にも設計過程に参加してもらうことで、生の声を設計に活かしました。

② 1日の流れから「動き」「気持ち」にフォーカスを当てる
1日の流れを切り口に、人の動き、気持ちの動きに目を向け、環境設定の視野を広げました。

アウトプット

① 動きの明確化によるスムーズな動線計画と部屋配置

② 登園から降園までの気持ちの動きに配慮した情緒的デザイン

Essential Question：みんなが楽しく、心地よい空間とは？

保育園で過ごす人（子ども、保護者、職員）みんなが楽しく、心地よい空間はどんな空間だろう？
「居心地が悪い」「いやだと感じる」人が出ないよう、1日の流れをを通じて、
こうなっていると誰かが困る？という視点で保育園の環境について対話を実施しました。

0（事前課題）
保育園をレイアウトしよう

物件の白図面を子どもたちと職員に配布し、理想の空間を描いてきてもらいました。
子どもたちは遊びの中で塗り絵のように、職員は「場の定義」「空間の定義」「保育園のコンセプト」を伝えたうえで、それらを実現するための空間に思い思いの保育園が集まりました。

1
時間別・動線と人的ボリューム

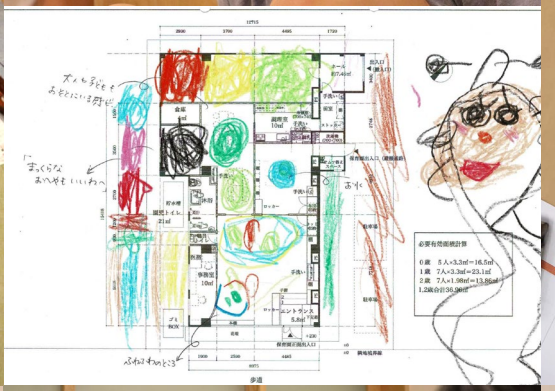
子どもたちの登園から降園まで、子ども、保護者、職員の動きを時間帯・活動で順に追っていき、いつ、誰が、どこに、どんな動線で動くのかをシミュレーション。
「人の流れがぶつかって混雑しそう」「人数が少ない時でもここで過ごすと楽しく過ごせそう」部屋や間口の配置が変わっていきます。

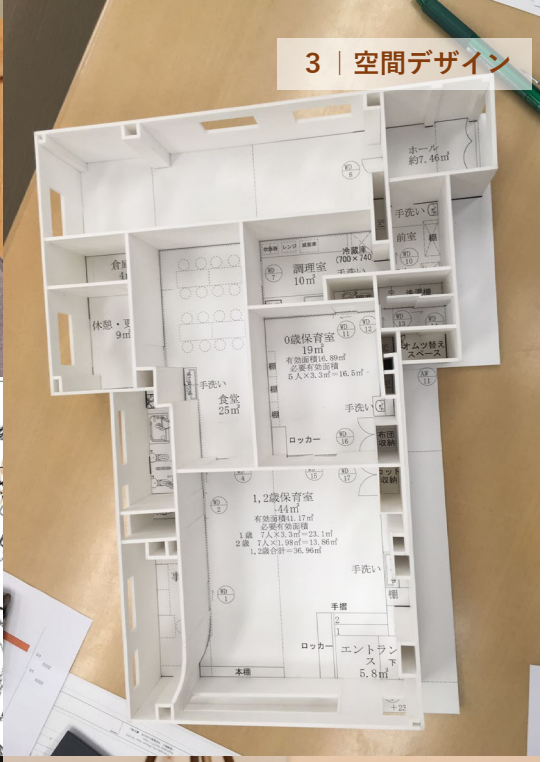
2
時間別・育みたい気持ち

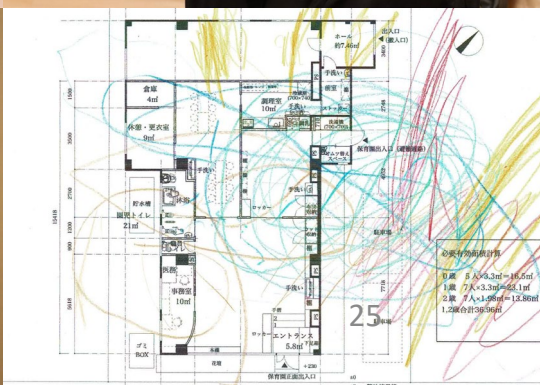
今度は時間と活動の変化による、気持ちの変化を追いかけます。「朝別れる親子はどんな気持ちになってほしい？」「ごはんを楽しいと感じてほしい」「午睡中の休憩や作業は気持ちを落ち着けたり、集中することもいい保育に大切」
気持ちを想像して、色や光、香り、音、切り分けが固まってきます。

3
人と心の動きに合わせた環境設定

1，2で話したことを踏まえながら、具体的な環境を考えていきます。間取りや家具・玩具の配置、音や光の切り分け方など、当初の基本図面からすこしずつ変化していきます。この過程を共有する中で、職員の環境設定に対する理解や考え方が深まっていくのが感じ取れました。




ホール
約7.46㎡
手洗い
前室
調理室
10㎡
冷蔵庫
(700×740
休憩・更
9㎡
0歳保育室
19㎡
有効面積16.89㎡
必要有効面積
5人×3.3㎡=16.5㎡
オムツ替え
スペース
手洗い
食堂
25㎡
ロッカー
1,2歳保育室
44㎡
有効面積41.17㎡
必要有効面積
1歳 7人×3.3㎡=23.1㎡
2歳 7人×1.98㎡=13.86㎡
1,2歳合計=36.96㎡
手洗い
手棚
ロッカー
エントランス下
5.8㎡
本棚


ホール
約7.46㎡
出入口
(搬入口)
手洗い
前室
調理室
10㎡
冷蔵庫
(700×740
食堂
4㎡
休憩・更衣室
9㎡
保育園出入口
(裏側通路)
貯水槽
圓型トイレ
2㎡
0歳
保育室
19㎡
1,2歳
保育室
44㎡
事務室
10㎡
エントランス
5.8㎡
ゴミ
BOX
本棚
駐車場
保育園正面出入口
25

4

人財育成

人的環境のデザイン

「お母さんの代わり」から乳幼児教育の専門家へ。同僚からチームへ。

レッジョ・エミリアにおいて、空間は「第三の教師」といわれ、その重要性が認識されています。では、第一、第二の教師はというと、言葉の通り教室にいる2人の教師を指します。

どんなにすばらしいコンセプトや空間ができても、子どもたちと直接的に関わる保育者がその役割や作法を理解していなければ台無しです。これからの保育者は、乳幼児教育の専門家へと転換する必要があります。子どもたちの人生の大切な期間を共に過ごしていること、子どもたちがさまざまな権利を有する一人の立派な人間であること、保護者や地域と子どもたちの成長を共に喜び合う関係性を築くことを認識し、保育者同士が対話を通してそうした関係性や環境を構築していくことが重要です。

その前段階として、開園に伴いバックグラウンドの異なる職員同士が互いを知り、同じ方向を向いて保育していくための「約束づくり」を職員全員で行いました。

Contents

・・・

約束づくりワークショップ・・・28～31

プロジェクトプロセス

3/7
開園前職員研修

コンセプト・方針・目標について
・
園見学（空間が持つ意味について）
・
4月からの保育を考える対話

企画・実施：にじいろキャンバス

4/14
約束づくりワークショップ①

私の理想の保育者像
・
「一人ひとりを主人公に」する保育とは？
・
方針から「したい保育」を考える対話
・
↑を実現するための保育者像とは？
・
私のincipit宣言

企画・実施：Learning in Context

4/30
約束づくりワークショップ②

①の「保育者像」の共通点探し
・
（理想と）逆の状態はどんな状態？
・
「逆の状態」にならない
ためにはどうしたらいい？
・
incipitの約束

企画・実施：Learning in Context

6月（保育再開）
約束運用のための自主的対話

約束運用のために、実行基準や、
アウトプット物の検討のため、
職員間で自主的な対話が
始まりました。

企画・実施：incipit保育園
サポート：Learning in Context

約束づくりワークショップ第1回

私のincipit宣言

職員間の約束づくりに向けて、まずはお互いの共通点や違いを知るために、
各々が抱いているコンセプトへのイメージや大切にしたいことを話し合い、
自分自身の物語のはじまりとなる「incipit宣言」を考えました。

①

漢字4文字以内で
理想の保育者像
を紹介してください

②

理念にある
一人ひとりを主人公に
する保育とはどんな保育？
考えや経験を教えてください。

③

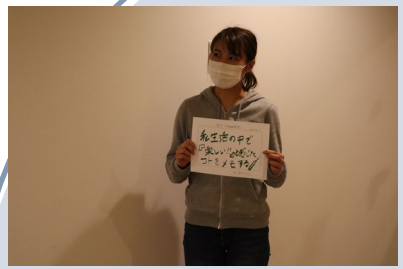
方針「0歳：色々な体験」「1歳：心を動かす」
「2歳：共に過ごす」から
どんな保育がしたいですか？

④

「したい保育」を実現するために、
どんな保育者が求められている？

⑤

今日の対話を通じて、
これからの日々の仕事での目標
incipit宣言
を考えて発表しましょう。

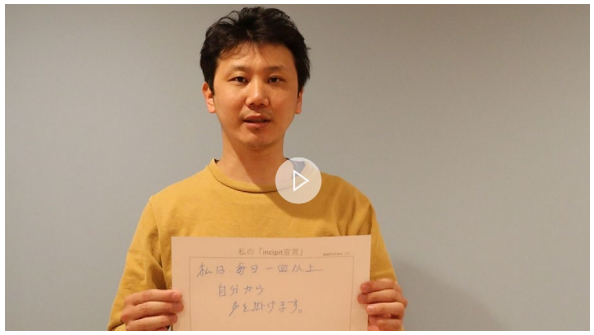


約束づくりワークショップ第１回

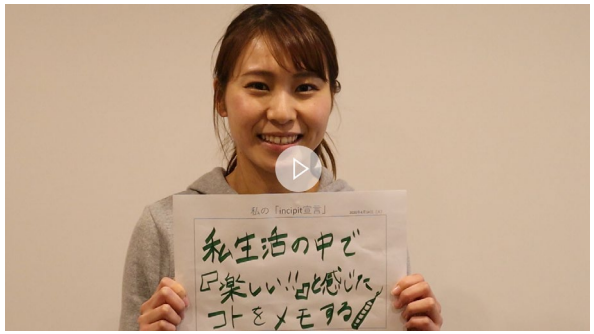
私のincipit宣言

制作物

画像をクリックするとインタビュー動画（YouTube）へ移動します



園長
園長という立場上、話しかけられる機会がある一方、事務室にこもってしまうと、話しかける機会が減ってしまう。自分から声をかけ、コミュニケーションを生んでいきたい。



保育士
さまざまな観点から「楽しい」を伝えられる保育士を目指して、自分が楽しいと感じたことをメモでストックし、楽しいことの引き出しを増やしていく。

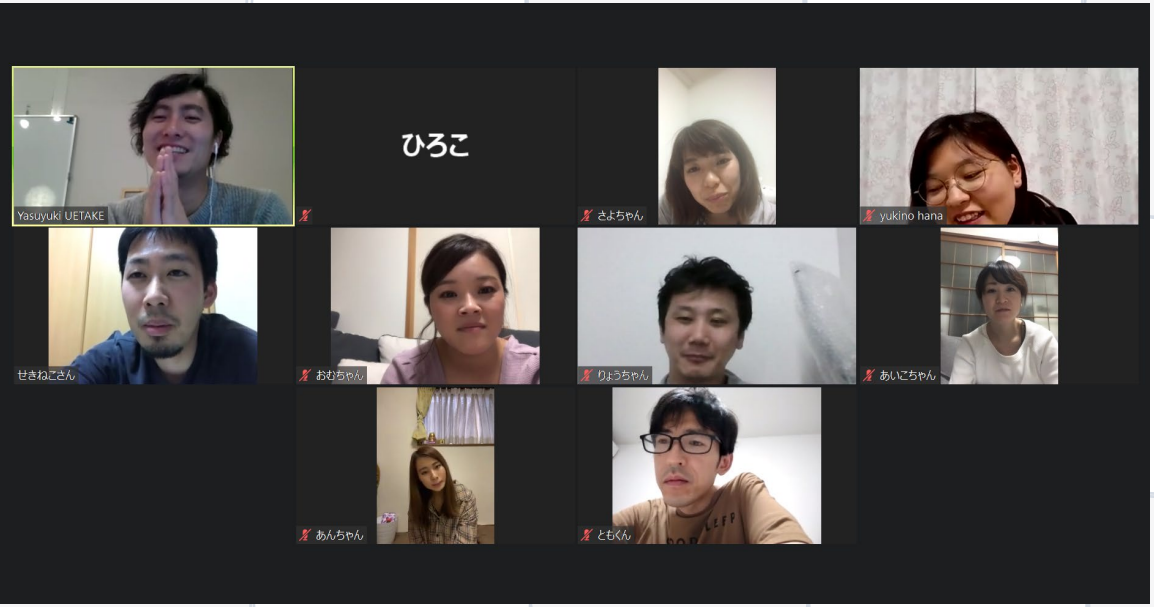
主任
自分自身も、子どもたちも、一緒に働く仲間も楽しい人生をつくっていくために、一緒に過ごす子どもたち、職員を１日１回笑わせることを目指して毎日を過ごす。

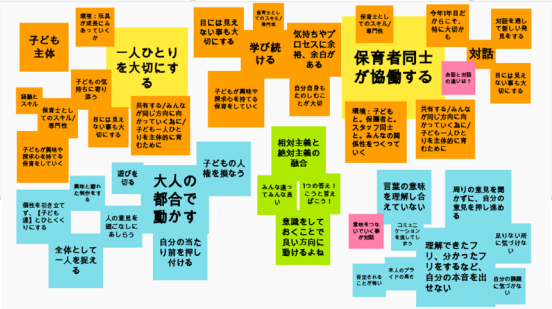
調理師
給食室での作業が多く、どうしても交流の機会が少なくなってしまうので、自分から積極的に声をかけることを意識して、子ども、保護者、保育者同士と交流していく。

約束づくりワークショップ第2回

incipitの約束

第2回目は、表題の通り、職員間の約束づくりを実施しました。
1回目の「保育者像」や「したい保育」を土台に、共通点を探し、
「逆の状態」とそうならないための「約束」を考えていきました。
なお、この回はコロナウイルス感染拡大防止のため、オンラインにて実施しました。





① （1回目を振り返り）
理想の保育者像の共通点は…？

② 絞り込んだ2つの共通点
「一人ひとりを大切にする」
「保育者同士が協働する」の
「逆の状態」とはどんな状態？

③ どうしたら
大人都合や一方的な押し付けにならない？

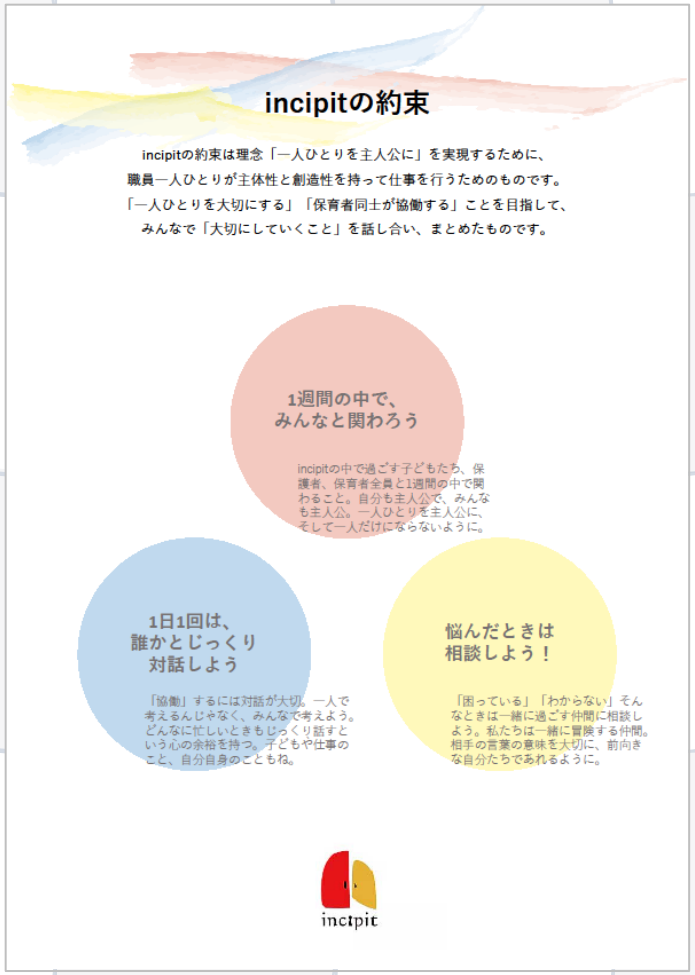
④ 周りに相談しない（できない）状態や、
理解したつもりにならないために、
どんなコミュニケーションや
普段からの関わり方が必要？

⑤ 2つの「逆の状態」を避けるために、
職員みんなが大切にする約束
を考えよう。

約束づくりワークショップ第2回

Incipitの約束

制作物と感想



incipitの約束

incipitの約束は理念「一人ひとりを主人公に」を実現するために、
職員一人ひとりが主体性と創造性を持って仕事を行うためのものです。
「一人ひとりを大切にする」「保育者同士が協働する」ことを目指して、
みんなで「大切にしていくこと」を話し合い、まとめたものです。

1週間の中で、
みんなと関わろう

incipitの中で過ごす子どもたち、保護者、保育者全員と1週間の中で関わること。自分も主人公で、みんなも主人公。一人ひとりを主人公に、そして一人だけにならないように。

1日1回は、
誰かとじっくり
対話しよう

「協働」するには対話が大切。一人で考えるんじゃなく、みんなで考えよう。どんなに忙しいときもじっくり話すという心の余裕を持つ。子どもや仕事のこと、自分自身のこともね。

悩んだときは
相談しよう！

「困っている」「わからない」そんなときは一緒に過ごす仲間に相談しよう。私たちは一緒に冒険する仲間。相手の言葉の意味を大切に、前向きな自分たちであれるように。

incipit

制作物：incipitの約束

理念「一人ひとりを主人公に」を実現し、子どもたち、保護者、職員みんながよりよく過ごすために、理想の状態からどうしたら離れずにいられるか、職員の心構えをまとめました。

職員の声

今回決めた3つの約束事はすぐに実行することができるし、**incipit保育園の基礎として守っていきたい**と強く感じました。特に私は新卒で経験が無いということもあり、保育の中で優先するべきものや分からないことも多いです。今回の約束事は分かりやすく大切なことを具体的に掲げることができたので、まずは**約束事を守りながら一つ一つこなしていこうと思います**。（保育士／新卒）

どんな保育をしていきたいか、どこを大切にしているのかそれぞれの気持ちを知ることが出来たのはもちろん、その人自身の性格やタイプなども同時に少し知る事が出来たので、これから**働く上で個々の個性を大切にしたやり取りがしていけるように感じました**。（保育士／クラスリーダー）

Next Step

約束実践を通じたコンセプト理解と保育実践への活用

通常の保育の中で、約束実践をしていると、職員があることに気が付きました。それは、よくよく話してみると、それぞれが考えているやり方や「できた」の基準が異なっているということ。
実は今回の人財育成の上でのポイントはここでした。それは、同じと感じていることも、人によってズレが起きるということ。だからこそ、職員同士が対話を重ねることが大切なのです。
そのことに気づき、それぞれの解釈を話し合い、どのように約束を守っていくかを自分たちの納得解で作り上げていくことが始まりました。職員自身も気づきや発見をし、他者と協働する中で成長していくことで「一人ひとりが主人公に」なれる保育園を目指します。

5

課題に対する結論と今後の取り組み

取り組んだ課題 ー解決すべき問い

事前に設定した当プロジェクトにおける課題

1

子どもの預かりや幼児教育から、
乳幼児教育に転換する上で、
保育園という「場」や「空間」
そして、人々との関係性はどうあるべきか？

2

保育園の運営および空間設計において、
経営者や設計者の暗黙知的な
個人の価値観や感性偏重になっていないか？
現場で過ごす子どもたちや保護者、職員が
物理的、情緒的にどのように過ごすかが
検討されているか。

3

切っても切り離すことのできない、地域の特性や
文化を捉え、地域になじみ、愛着を持ち、ふるさ
とにしていくためにできることはなにか？

▶

課題に対する結論

プロジェクトを通じて得た結論・発見

1

これからの乳幼児教育が大切にするもの、
それは子どもたちの「教育と権利の保障」
であると結論付けました。
そして関係者各自と「教育と権利の保障」
のための新たな関係を築いていきます。

2

当事者が空間設計に混ざることにより、
「運営を見通したリアルな設計に至ること」
「運営後の環境設定への意識が向上すること」
をプロジェクトを通して発見しました。
時間の経過や職員の入れ替わりによって
これらが希薄にならないよう、本資料を以って、
設計の意図を記録化し、引き継いでいきます。

3

地域の特性を反映した空間デザインが、
地域や保護者とのコミュニケーションにつながっ
ています。まずは思想や姿勢を形にすることで、
向き合う関係性ができると感じています。

▶

今後の取り組み

プロジェクトの成果と今後の課題感

1

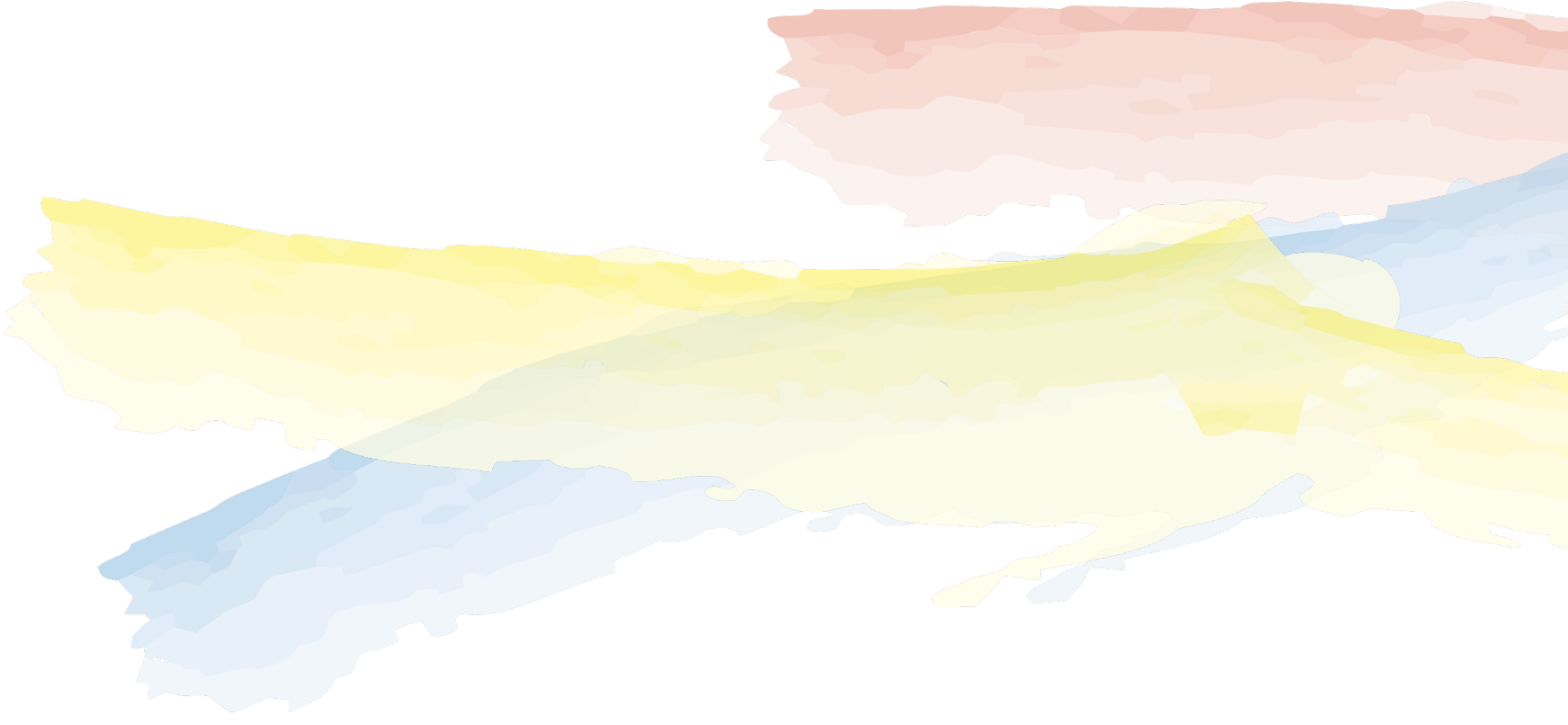
「教育と権利の保障」、言い換えると、
「出会いと共に育つこと」の実践と成果を
まずは園の中で記録化・蓄積し、
外部向けのセミナーや研修を通じて発信し、
乳幼児教育と共に創っていく仲間を増やします。

2

保育と空間の視点で、当事者の行動や気持ち
を捉え、設計と実用・実態の検証を行います。
同時に、本資料に基づいた環境設定と
研修を行うことで、「ハコモノ」にならない
保育環境を目指して運営を行います。
また、外部向けにセミナーや研修を実施し、
本プロジェクトで得た知見を共有していきます。

3

生まれたつながりやコミュニケーションを基盤に、
「地域を大きな園庭に」と実現していきます。
実際の場に出かけ、体験することで、地域への
愛着、地域からのまなざしを育みます。



にじいろキャンバス

Ashida Architect & Associates

Learning in Context

Designed by Learning in Context